

大橋清秀著

和泉式部日記の研究

初音書房刊

六百部限定版

昭和三十六年十一月二十日 発行

和泉式部日記の研究
定価 二千円

著者

大

橋

清

秀

大阪府守口市桃町五番地

発行者

小

島

清

印刷者

今

栄

三

男

発行所

初

音

書

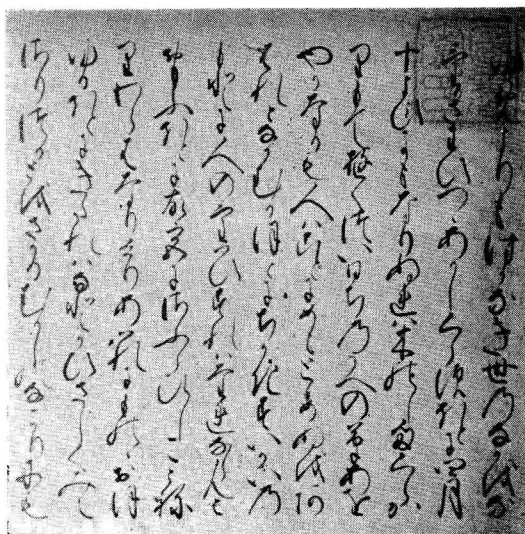
房

京都市東山区三条通白川橋東五丁目

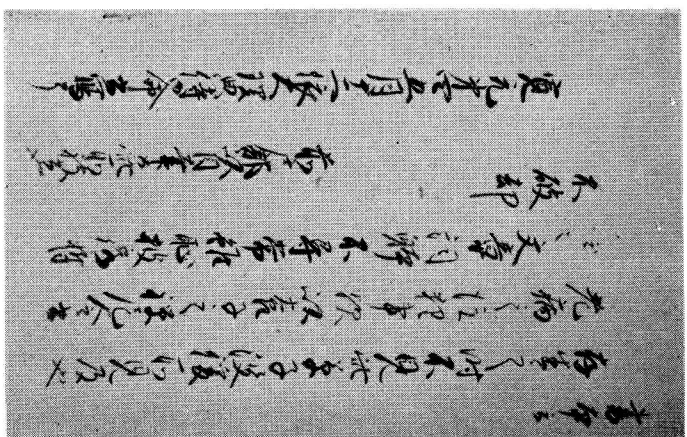
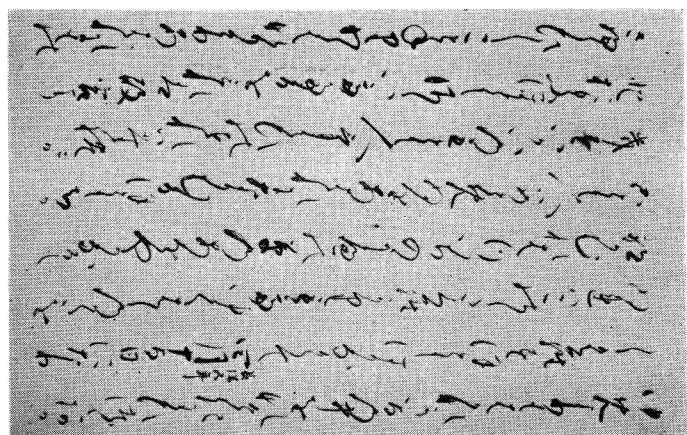
電話⑦三二一二番
振替京都一二二九番

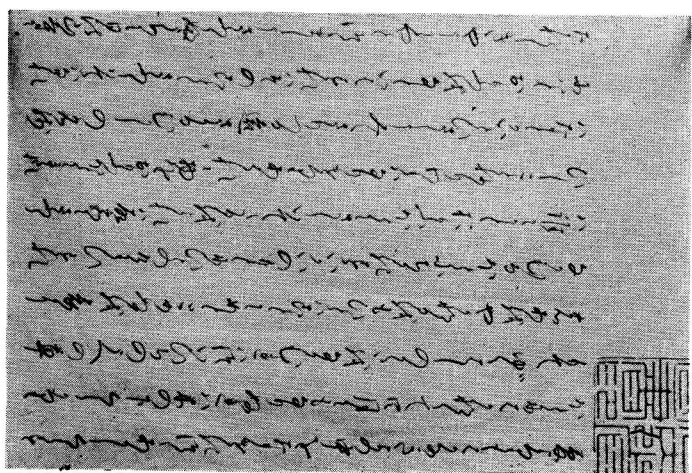
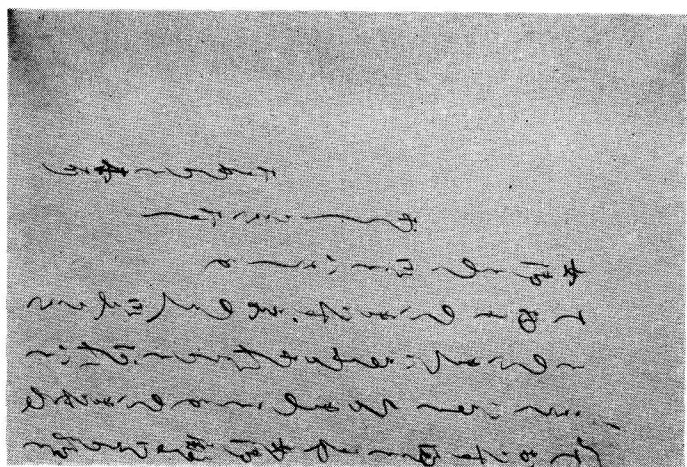


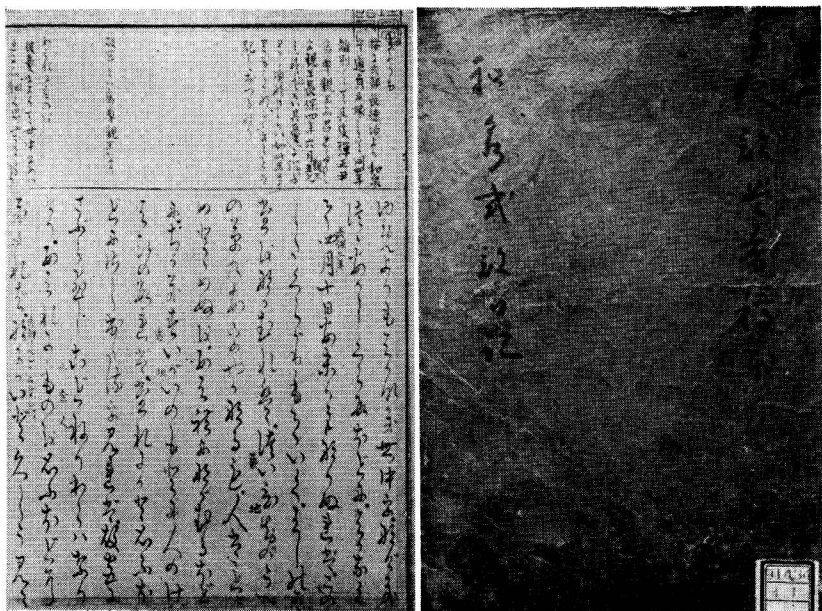
和泉式部木像 誠心院蔵



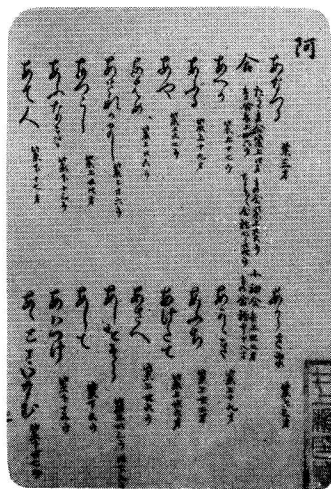
1 三条西本（宮内庁書陵部蔵）表紙・本文巻頭



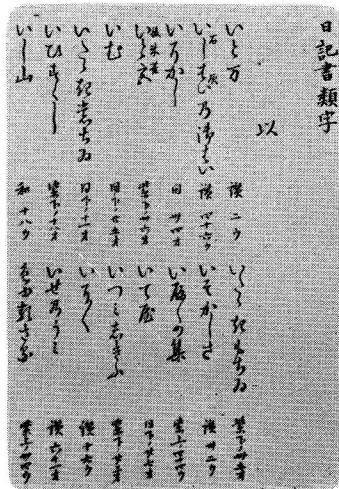




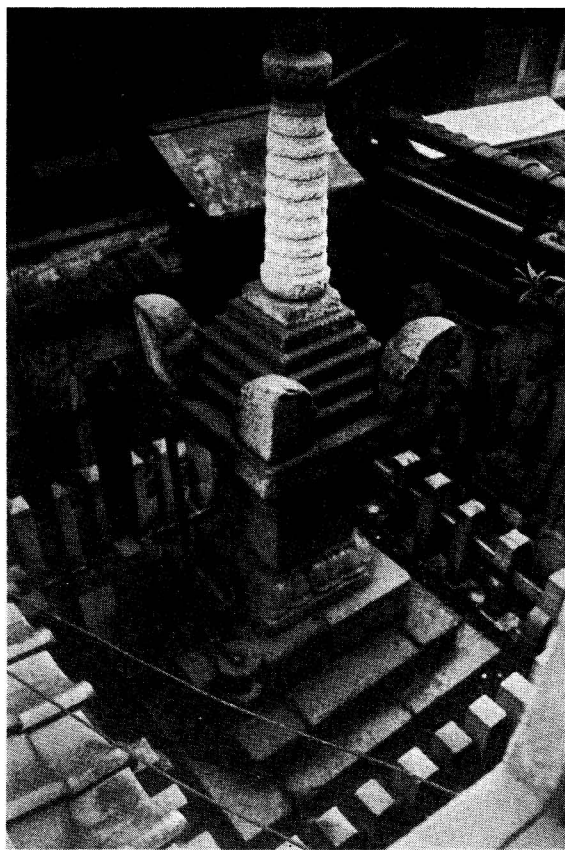
5 稿本 六人部是香筆（天理図書館蔵）表紙・巻頭



7 類標（無窮会神習文庫蔵）本文巻頭



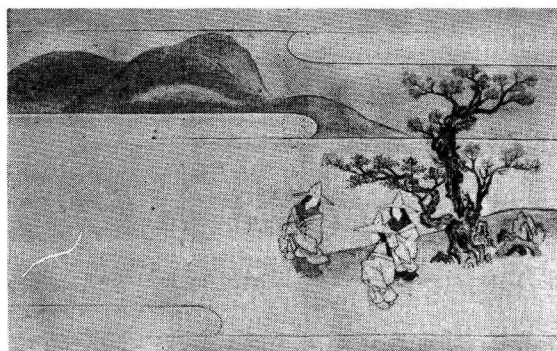
6 日記書類字（上野図書館蔵）本文巻頭



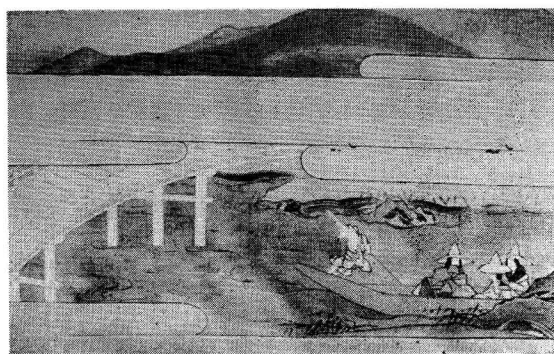
實篋印塔 誠心院 撮影松本繁藏氏



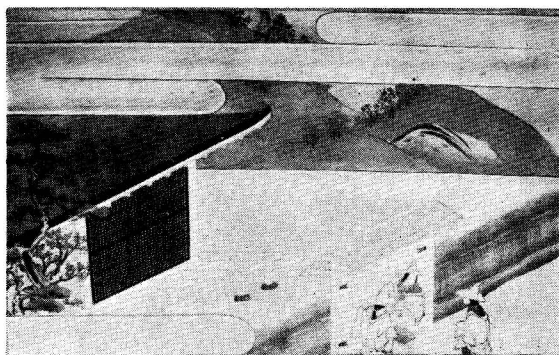
和泉式部縁起（誠心院蔵）上巻 卷頭



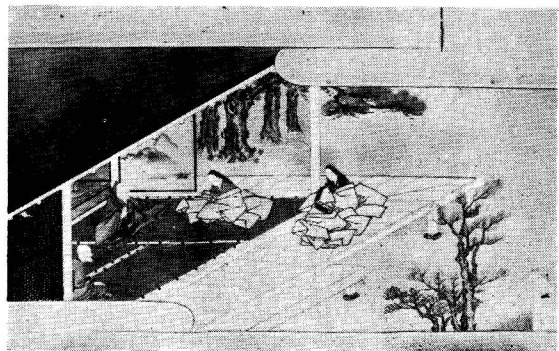
（第 一 図）



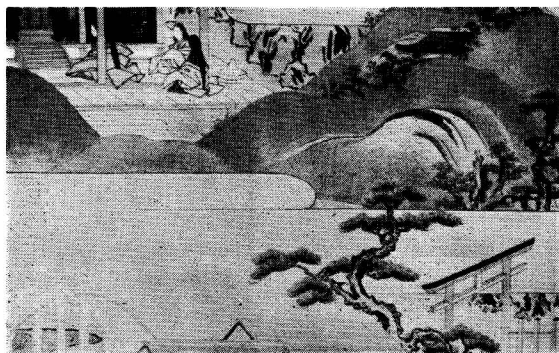
（第 二 図）



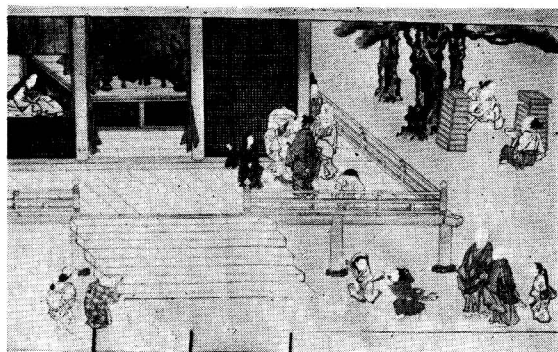
(第 三 図)



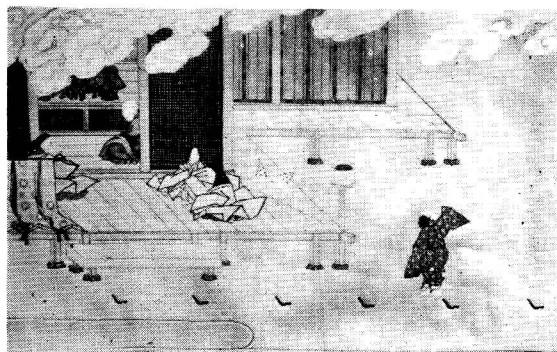
(第 四 図)



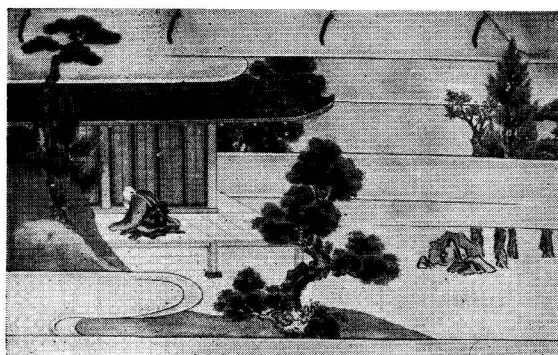
(第 五 図)



(第 六 図)



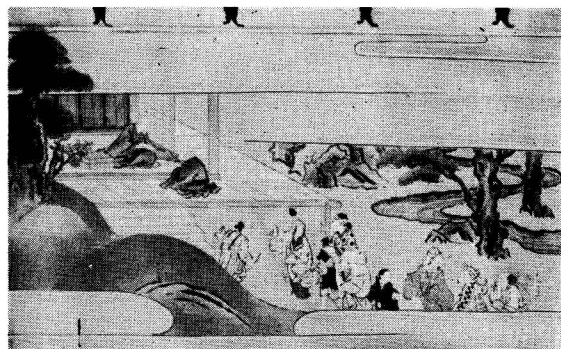
(第 七 図)



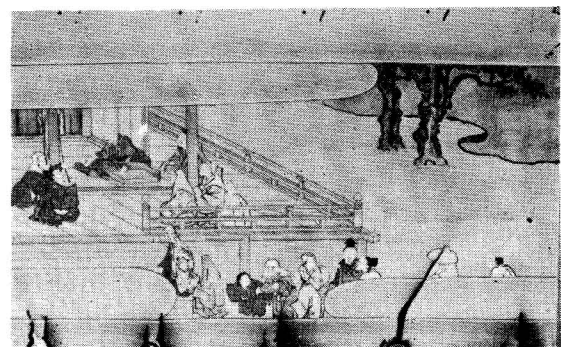
(第 八 図)



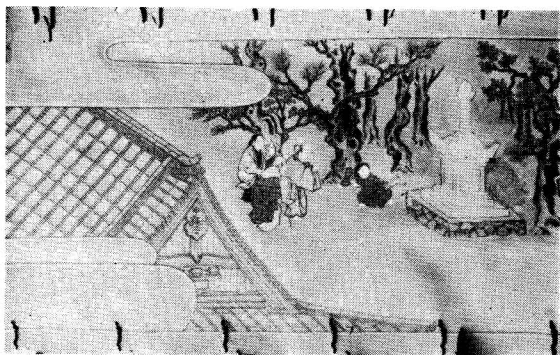
(第九図)



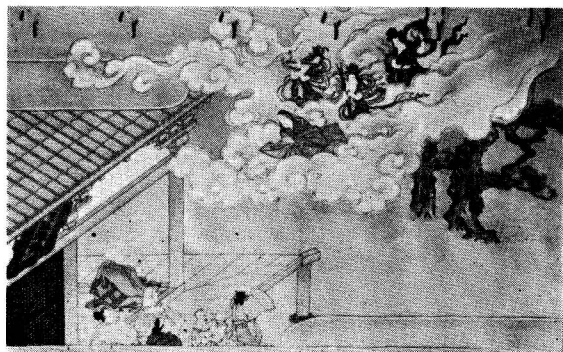
(第十図)



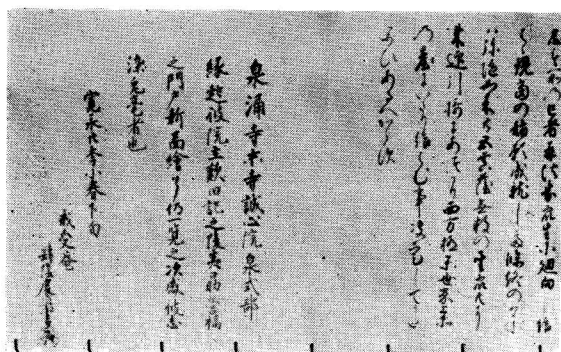
(第十一図)



(第十二図)



(第十三図)



和泉式部縁起(誠心院蔵)下巻 卷末

序

清

水

泰

大橋清秀君は私の教え子である。教え子がその研究の成果を一冊の本にまとめて世に出すことになつたのは、私にとつてこの上もなくよろこばしいことである。そこには指導者として培つて来たものの成長を眺める楽しさと満足感とがあるからである。

戦時中、日本の古典文学の研究に対して、あらゆるものを八紘一宇の精神と結びつけるように強いられた時代があつた。私のような不器用ものには、まことに困つた「掟？」であつて、その成すところを知らず、茫然として、腕をこまぬき、余儀なく沈黙を続けて来た時代であつた。

もつとも、これは単に私だけの問題ではなく、多くの研究者が多少なりともめいわくを蒙つて来たことは事実である。

戦後、恰も一種の鎖から解き放たれた如くに、国文学者は改めて真に自由の立場から、古典文学の本質を究めることが出来るようになった。かくして与えられた自由の見地から、日本文学の研究は、あらゆる方面に驚くべき発展を見ることが出来るようになったのである。こうした時代に迎えられたのが和泉式部という才女であつた。和泉式部の何者にもこだわること知らぬ自由奔放の筆は、たんに学者だけでなく、古典文学を愛好する一